

むすびわざコーオプ・プログラム

— プログラム概要 —

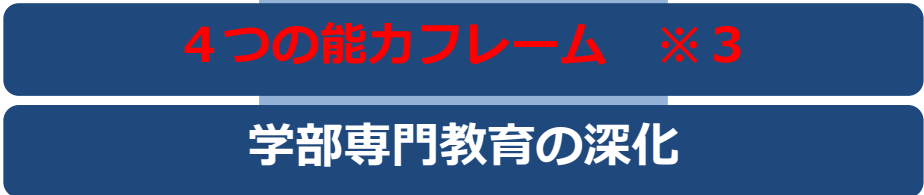
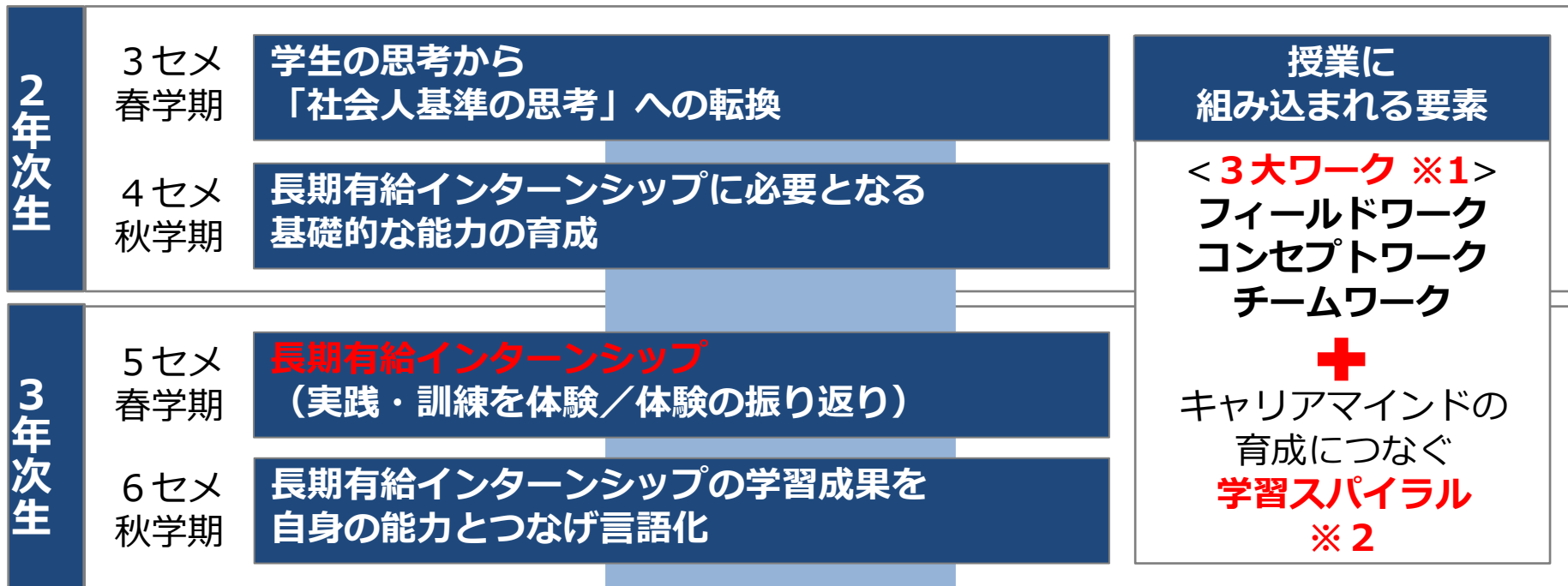
京都産業大学
キャリア教育研究センター

どういう状況にあっても
ミッションを任せられる
能力と志を持った人材へ



社会を生き抜く力

学部専門教育を土台とした**長期有給インターンシップ**を中核に備える2年間一貫のコーオプ教育の元、「社会を生き抜く力」を持つ人材の育成をする。



「※1」は3ページ参照
 「※2」は4ページ参照
 「※3」は5ページ参照

社会を生き抜く力

どのような状況にあってもミッションを任せられる能力と志を持った人材へ

授業に組み込まれる3大ワーク

①

フィールドワーク (座学と実技実学)

- 現場で考え、感じる
- 現場で調べ確認する
- 現場で何をどう学ぶか計画し、その学習成果を分析し報告する
- PDCAサイクルをスパイラルさせる

②

コンセプトワーク (論理思考)

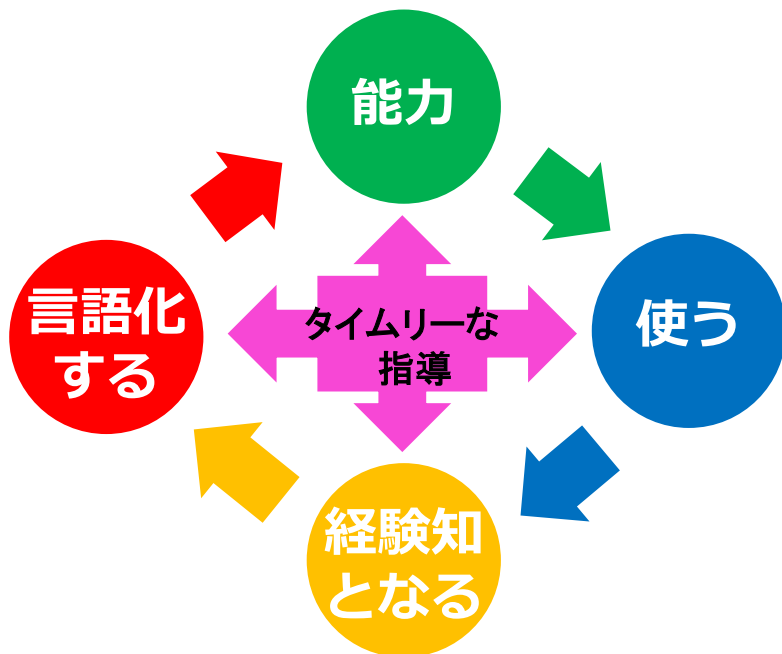
- 全体を貫く物事の本質をとらえる
- たくさんの情報をフレームワークし、自分の考えとして整理する
- 問題を見つけ、重点化し、解決策を立案・決定・実行する
- 企画書・報告書の文章化とプレゼンテーション

③

チームワーク (競争と協調)

- 目的・目標など情報の共有を積極的に行う
- 自分の考えを表現し、互いの違いを乗り越えて、仲間と助け合ってより良い考えを創造する「協調性」の涵養
- 役割分担と連携を通して「信頼関係」を育む
- 責任感の涵養 (責任と権限一致)

学習スパイラルモデル



プログラムで体験する 学習を動機付ける 「11のキッカケ」

- ①敗北、悔しさ ②衝突、軋轢
- ③やり抜く喜び ④貢献する喜びと自我
- ⑤行動規範の習得と葛藤
- ⑥未知へのチャレンジと好奇心
- ⑦洗礼と憧れ ⑧フロー体験
- ⑨仲間意識（集団への帰属）協調と競争
- ⑩システム思考 ⑪目標管理思考

- ・キャリアマインド（自己と社会への関心）の育成
- ・自己効力感
- ・上手な頭の使い方
- ・主体的学習意欲
- ・専門知への関心

自己の成長を語りうる根拠ストーリーの構築

プログラムを通し目標が達成できたと学生に評価・自覚させる4つの能力フレーム

①学修する方法を知っている

クラス(授業)で身につけた学習方法を環境に応じた自分なりの方法として使うことができる。

③自己を知り個性を磨く方法を知っている

人格形成論の中核になる個性化の育成がなされ「意志の強さの形成」「自己の思いや考えを主張する方法の獲得」などが成果となる

②見通しをたてる力を持っている

「願い」から「解決策」までのストーリーで考え行動し、全体と部分の認知力を持つ

④適応力ある社会性を身につける

自己と他者とを受容し合い、社会に関わり、社会に貢献しようとする姿勢が涵養されている。他者のために汗をかける。

4つの能力フレームを支える根拠能力

各学部で学んできた 専門領域での学び

むすびわざコーオププログラムにおける 専門教育科目での学び

- 各学部での専門性を活かした事前・事後の研究
- 実際の長期インターンシップにおける就業体験



むすびわざコーオププログラムにおける 共通教育科目での学び

- 目的・目標を設定する力
- 目的・目標を達成するための方針(戦略)策定力
- 方針(戦略)に従った実行項目の決定と実行力
- 振り返りと問題発見力および解決力
- 自らの行動規範を設定する力
- 論理的コミュニケーション(書く、話す)力
- 情報分析力と編集力
- 表現力ある日本語運用能力
- 体験的チームワーク力
- プレゼンテーション力、スピーチ力

- 2年次・3年次の**2年間一貫**のコーオププログラム
- 専門教育科目：16単位を付与／（経済・経営・法の3学部）
 - 3年次春学期（5セメ）：長期（15週間）・有給のインターンシップ
 - 2年次秋学期（4セメ）と3年次秋学期（6セメ）に事前研究と事後研究を開講
- 共通教育科目：14単位を付与
 - 「目的・目標の設定」「論理的コミュニケーション」など職業生活を支える基本スキルを育成

年次	2年次		3年次	
区分	3セメ 春学期	4セメ 秋学期	5セメ 春学期	6セメ 秋学期
共通教育 科目 (14単位)	むすびわざ コーオプセミナー1 (4単位)	むすびわざ コーオプセミナー2 (4単位)	むすびわざ コーオプセミナー3 (2単位・集中講義)	むすびわざ コーオプセミナー4 (4単位)
専門教育 科目 (16単位)		インターンシップ 事前研究 (2単位)	長期インターンシップ (国内) 長期インターンシップ (海外) (12単位)	インターンシップ 事後研究 (2単位)

1 能力と経験をつなぐ循環と、対話を中心にした調査・ロジック・発表の循環をスパイラルさせる学習環境をつくっていく。

- 対話を中心にして、ディスカッション、プレゼンテーションの機会を多く持つ
- 論理思考が意識された対話を生み出す環境作りに工夫する

2 競争と協調を合言葉に、学生同士が切磋琢磨する環境を作りあげ、互いの能力向上に自律的に取り組み、他者のために汗する大切さを学べるようサポートする。

- 他人のために頑張ることができ、他者からみて「一緒に行動したい」と思われる思考と行動が出来る = チームワークに優れた仲間関係を構築する

3 担当教員は、丁寧な観察を踏まえたフィードバックを心がけ「もうひと踏ん張りする」楽しさと喜びを学生に教え、タフな学生を育てることに注力する。

- 最良を求めて最善を尽くす「粘り根性」の涵養を目指す
- 学生個々の個性を、学生自身で言語化する試みを繰り返す
- 小さなことこそ大切である「小事大事」を徹底する
- 授業時間を超えた個別指導にもエネルギーをかける（ゼミ的な対応を心がける）

1 企業開拓

- 揺るがぬ信念をもち粘り強く開拓を続ける。（ハードルは非常に高い）
- 教育プログラムを企業側に丁寧に説明し、「一緒に学生を育てる思い」を共有する。
※この部分が共有できない会社にはアプローチはしない。
- 実習内容の質を担保するうえで、「整備された研修システム」、「精度の高い業務マニュアルの社内徹底」、「事業計画に基づいた経営が浸透」の3点の要素がある企業へアプローチをする。
※実習の質が保証され、教育的な要請にも柔軟に対応できる力がある。

2 社会保障問題

- 事前に専門家を交えて協議することでリスクを減らし送り出す。
- 本学においては、平成26年度以降、以下の条件で学生を送り出している。
⇒「健康保険・厚生年金保険/雇用保険」加入する必要がない範囲内で就業
「労災保険」企業負担で加入

3 学内実施体制の整備

- 企業との密なコミュニケーションを継続するため、職員のサポートは欠かせない。
- 受入れ企業との関係、学生の学修状況について、関係学部（教授会、教務委員会など）へ、適宜、丁寧な報告を継続する。

1 取り組みの成果

- 仕事に関わる漠然とした学生の不安や期待が確実に具体化している。長期だからこそできる経験や観察を学生自身の言葉に言語化することで（教員の粘り強い観察・フィードバックと達成要求が必須）、基準をしっかりとった評価を求めるようになり、選職などライフイベントについても地に足をつけた議論を始めている。親との会話も感覚的なものから具体的なものに近づき、コミュニケーションの質が上がっている。
- 働く意味について真剣な問いが生まれ、ディスカッションが始まっている。努力の見積りについても具体的になり、実行と結果の間（プロセス）に学生が向き合う役割認識や能力は、自己理解を進めている。さらに、社会とのつながりを強く意識出来るようになり、個と全体の両方の視点から物事を理解しようとする姿勢が生まれている。教員からの専門的な理論提供や講義が必須となるが、目標設定、意思決定、組織適応、プランニングなどキャリアの専門的な領域への学術的アプローチが始まっている。

受講期 (実習年度)	1 期生 (H27年度)	2 期生 (H28年度)	3 期生 (H29年度)	4 期生 (H30年度)
学生数 (実習先)	13名 (国内12名・海外1名)	19名 (国内17名・海外2名)	13名 (国内12名・海外1名)	8名 (未定)
受入企業数	国内4社・海外1大学	国内8社・海外1大学	国内7社・海外1社	未定

※1～3期生は2～4年次生までの3年間一貫のプログラム、4期生より2・3年次生の2年間一貫のプログラム

2 今後の課題

- 情熱と事業策定実施・社員育成経験とキャリア専門性を兼ね備えた教員の養成と配置。正しい設計と取り組みを推進し、評価できる教員が意思決定の核にならなければ、一般的な教育支援プログラムの一部になってしまい、質的発展は望めない。